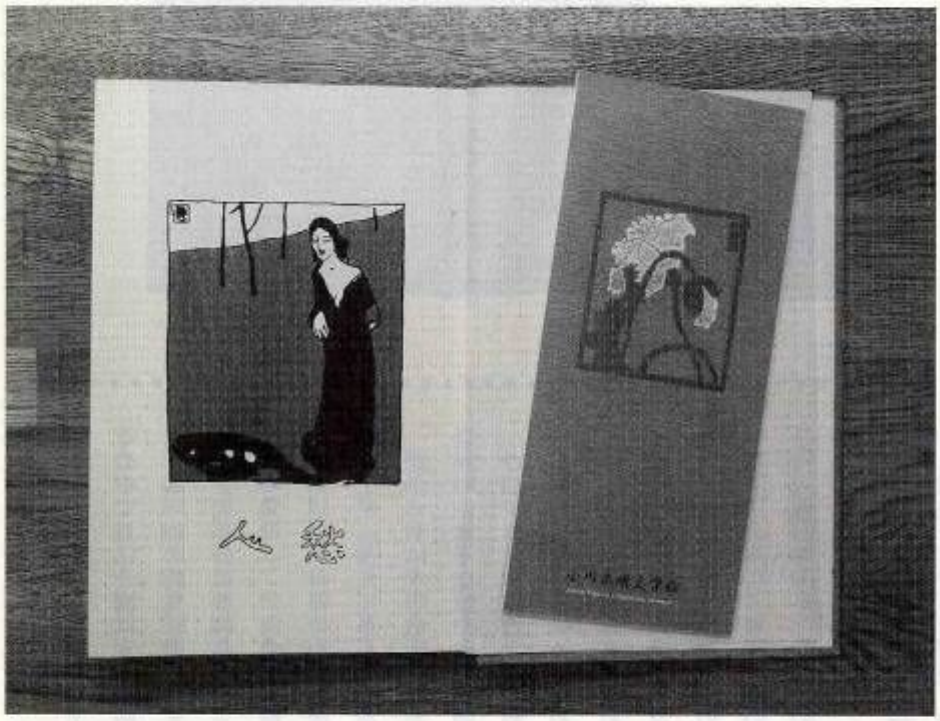
小川未明文学館 館報

第二号

小川未明文学館

vol.2



小川未明第一短篇集『愁人』扉と一筆箋（デザイン：『愁人』表紙）
装幀：竹久夢二　発行：明治40年、隆文館

小川未明文学館 館報 第二号
二〇〇八年五月三十日発行（年刊）

目次

【寄稿】
小川清隆　未明童話「らんの花」連想　2
宮川健郎　未明の消息　4
【収蔵資料紹介】　6
【報告】
平成十九年度特別展
「未明童話を彩る童画家 川上四郎展」　8
小川未明文学館 一年の記録（平成十九年度）　10
【作品の中の風景①】生誕の地を訪ねる　12
【小川未明文学賞】　13
【ボランティアネットワークだより】
「のばら vol.4」　14
【文学館からのお知らせ】　16

小川未明文学館
新潟県上越市本城町八―三〇（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086

未明童話「らんの花」連想

小川 清隆
（春日山神社宮司）

ここ十年近く、私はFM上越で「小川清隆のちょっと道草」と題して、週に一度放送させて頂いているが、その中で月に一回は未明童話を紹介している。

無論一回の持ち時間の十五分では、童話一編の朗読は無理なので、朗読は冒頭の部分と終結の部分にとどめ、主要部分は要約して話させて頂いている。

私の父母は、未明の父小川澄晴と義子縁組をしたために、私は幼年時代を未明の両親と共に暮らした。

未明は春秋の穏やかな季節や、何か事ある度に帰省して両親と共に過ごした。そんな時未明は新刊の童話集を土産に携えて来るのである。

だから私は未明童話で育てられたと言っても過言ではない。しかし、そうした童話集は大正末の父への献呈本の他はみな昭和の初めの頃の物であった。

今回、ラジオ放送するにあたっては未明童話を明治、大正、昭和の創作年代に関係なく紹介した。無論それらの大部分は私にとって初めて目を通した作品だったが、その結果私が感じたことは、未明が自然に対していかに深い造詣をもっていたかと言う事である。未明をナチュラリストであったと言っても過言ではない。

編集者が私に与えた主題は「未明と植物」であったのだが、未明童話に登場するのは植物だけにとどまらない。白熊や鶴や白鳥などの大型の動物をはじめ、小鳥や鼠、蝶や蛾などにまで及んでいる。

明治三十四年、未明一家の念願だった春日山神社が完成する。この時寄付者に引き出物とされたのが越後春日山畫図であった。その図の左上に高田中学校の教師北沢正誠（乾堂）の「登春日山記」が載せられている。

未明は乾堂の愛弟子であったから乾堂は未明にせがまれての登山であったに違いない。

未明親子はできたばかりの神社参道入り口まで出向いて乾堂を迎えた。以後城跡を未明が案内して回った。

この時の乾堂の文末には健作は余の門人であると書かれている。

当時の春日山は今日のような広い道は付いていない。その道を未明は精通していた。

少年時代、未明は神社建築の進捗状況を見たり、除雪作業の人夫を連れて高田から来たことはしばしば未明研究者に語られているが、未明の山野の跋渉（ばっしょう）ははるかに広範囲だったのである。

シュンラン

その目的は考古学への興味であった。

未明は友人の森成麟造と共に石器や土器を求めて山野を歩き回った。未明が収集したと思われる曲玉が神社の宝物目録に記載されている。残念なことに実物は火災のため現存していないが、雑誌「史学会」などを講読していた。後に森成麟造のコレクションが上越市の総合博物館に寄贈されたが、実に貴重な物が多かった。

未明が自然に深い関心を持つようになったのは、こうした少年時代の暮らしに因るのではないか。

ところで我が家では戦前、春は家族みんなでシュンランの花摘みにいそしんだ。摘んだシュンランの花は母が塩漬けにする。一度漬けた花を、夏に入るまでにもう一度改めて塩にまぶして瓶に保存する。

こうしたシュンランの花はお茶に入れて来客にすすめるのである。熱いお茶を注ぐと縮んでいたランの花は、たった今摘んだばかりと思うほどにしゃきっとする。

こうした塩漬けのシュンランの花は時には未明の所に送られていった。

未明もランが好きで東洋ランを多く栽培していた。

未明の作品に「らんの花」と言うのがある。未明はこの作品の中でランについての多くの知識を披瀝している。主人公はランの花を通じて人の生き方を語るのだが、最後に友人の故郷へランの花を探しに行く。その故郷の描写はどう考えても春日山の風景に他ならない。

生れた時からこの山に住んでいる私にとっては、未明の語る自然はすべて私自身の体感と同じものであった。

「山には、まだところどころに雪が残っていました。しかし五月の半ばでしたから、木々のこずえは、生気がみなぎって光沢を帯び明るい感じがしました。谷には、雪があってわずかに底を流れる水の音がしたけれども、その音を聞くだけで、流れの姿は見えませんでした。そして雪の消えたがけには、ふきのとうが萌え、岩鏡の花が美しく咲いていました」と述べ最後に「花は神様に見せるために咲いているのだ。花を愛するなら、らんを取ってはいけない。」という雲の声を聞いたのである。それ以来、主人公は「花よりも空をいく雲を愛するようになった。」と結んでいる。

未明の消息

宮川　健郎
（武蔵野大学文学部教授）

児童文学研究者の鳥越信が、小川未明の童話について、「一口でいえば、そのテーマがすべてネガティヴなもの――人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびる等々――であり、その内包するエネルギーがアクティヴな方向へ転化していない点で児童文学として失格である」としたのは、一九五九年だった（『新選日本児童文学1　大正編』解説、小峰書店）。

一九五九年は、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社）などの作品によって、日本の現代児童文学が出発した年だ。現代児童文学は、小川未明を中心とする「童話」を批判的に検討した五〇年代の議論をへて、成立した。現代児童文学の出発期の作品の多くは、「アクティヴな方向」をめざしていた。たとえば、六〇年に刊行された、山中恒『赤毛のポチ』（理論社）、松谷みよ子『龍の子太郎』（講談社）、今江祥智『山のむこうは青い海だった』（理論社）の三作品は、ずいぶんタイプがちがうが、これらから、「世の中は変革されるべきもの、人間は成長すべきもの」という共通のモチーフを引き出すことができるだろう。山中や松谷の主人公は、自分たちの貧しさを越えようとし、今江の主人公は、弱気な自分を何とかしようと旅に出る。ところが、その現代児童文学も、二〇年ほどのちには、曲がり角をむかえることになる。

一九八〇年に刊行された、那須正幹『ぼくらは海へ』（偕成社）のおもな舞台は、大川の河口ちかくのセイタカアワダチソウの生いしげった埋立地だ。新町の進学塾へかよう途中で、ここに立ちよる少年たちは、たまたまはじめた船づくりに熱中していく。材料は、埋立地にすててある古材をつかえばよい。彼らは、「附属」か市内の私立中学へ行こうというエリートたちなのに、その心はうつろだ。彼らは、まず、小さなボートをつくり、それが転覆すると、やがて、帆のついたいかだを組み立てはじめる。

事故は、嵐の夜におこった。岸壁にぶつかって、こわれそうになっているいかだをまもろうとした耐郎が、ロープに足をとられて死んだ。埋立地に出入りしていた者たちは、きびしくとがめられたが、こわれたいかだを、もう一度組みはじめたふたりがいた。邦俊と誠史だ。邦俊の父は、総合病院の事務長。その父が若い看護婦と深い仲になって、家庭は、崩壊寸前だ。それでも、家族は、自分自身をいつわって生きている。誠史は、父を早くなくした。母は、彼の将来に期待している。誠史は、祖母と、仕事をもつ母とのいさかいのなかでくらしている。邦俊と誠史は、進学塾へも行かず、いかだをつくりつづける。邦俊の「心のなかにしかけられていたダイナマイト」が爆発した

のだ。夏のおわりに、邦俊と誠史は、いかだにのって海へ出ていく。作品は、ふたりの死を暗示しておわる。

現代児童文学の出発期の諸作品は、作品に描かれた問題と、それを乗り越えていく力をくらべると、乗り越えていく力のほうが強いかのように書かれていた。「理想主義」、「向日性」の文学だったのだ。困難な現実をのがれて、死へと船出する少年たちを描いた『ぼくらは海へ』は、その乗り越えていく力のほうが必ず強いかどうかわからない、というところで書かれている。児童文学が子どもの現実を深く書けるようになればなるほど、物語に安易な方向づけをするわけにいかなくなったのかもしれない。

私は、一九八〇年の『ぼくらは海へ』を現代児童文学の変質を示す作品としてきた。その後、八五年になると、身近な人の死など、子ども時代にもある「影」の部分を書いた、森忠明の短編集『少年時代の画集』（講談社）があらわれる。八〇年代以降の児童文学は、五九年の鳥越信が否定し、長くタブーとされてきた死の問題など、ネガティヴなテーマをむしろ積極的に書こうとしている。いわば、「未明的なもの」が復権してきている。未明童話の文章が詩的で象徴的だったのに対し、那須正幹ら現代作家のそれは散文的だから、未明そのものではなく、「未明的なもの」なのだけれど……。

一九九〇年代になると、児童文学／文学のボーダレスということがいわれた。本来は子どもが読者のはずの児童文学の読者層の上限があがっていき、児童文学は大人の読み物でもあるようになった（江國香織『つめたいよるに』理論社、一九八九年など）。これは、「未分化の児童文学」の再来ともいえる。かつて、児童文学評論家・作家である古田足日が、未明童話を「未分化の児童文学」としたのだ。「おとなの文学から完全に分化していない児童文学という意味」だという（古田「内にある伝統とのたたかいを」、『日本児童文学』一九六一年一〇月）。

現代児童文学の歴史のなかで「伏流」としてあった「未明的なもの」が、顔を出してきた。「未明的なもの」というのは、現代児童文学が抑圧してきたものをあらわすことばと考えてほしい。今日の児童文学は、あいかわらず、未明をかかえこんでいると思えてならないのだ。

小川未明文学館　出会いのロビー

文学館収蔵品紹介

■小川未明署名入
『小川未明童話全集』
4、5、6、7巻

■小川未明掛軸
「明日の社会を知らんと欲せば
今日の子供を見よ」

本の扉の裏に、未明の署名が入った四点の資料を当館で所蔵している。平成18年3月、旧中郷村立片貝小学校の廃校に伴い、文学館へ移管された資料であり、『小川未明童話全集』（講談社、昭和25年～27年）全12巻のうち、四巻から七巻までの四冊である。この中の三冊には直筆で、未明の詩が記されており、その詩は、

いかなる烈風も若木を折る力なし　伸びろ　子供等よ
（第4巻）

すべての詩は少年時代の感覚から生れる
（第5巻）

雪は止み鳥飛んで海ひとり遠く鳴れり
（第6巻）

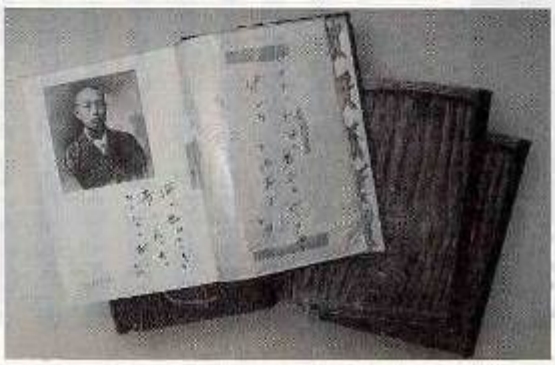
そして第7巻には、「片貝小学校の皆さんへ　昭和三十一年二月　未明　」と記されている。

いづれの詩も未明が好んで色紙や短冊に揮毫したものであり、このうちの二篇は、上越市の春日小学校（「雪やみて…」）と岩手県江刺市（「いかなる烈風も…」）で詩碑となっている。

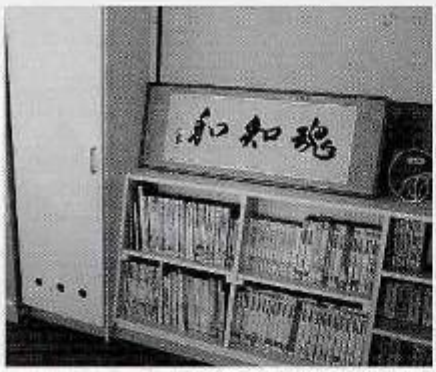
未明自らが子どもたちへのメッセージを記したこれらの童話集は、昭和31年に寄贈されて以来、片貝小学校の図書室で読み継がれてきた。貸出カードの名前を眺めていると、これを手にした子どもたちの喜びが伝わってくる。本の背には、「大島文庫」というシールが貼付され、見返し裏には、片貝小の蔵書印とともに、「大島吾一氏寄贈」とある。当時の新聞資料等によると、大島吾一氏（十日町市出身、当時は神奈川県在住）は、戦争中、奥さんの実家である片貝に疎開し、「食糧を供給」してもらうなど、「親子二人、村の人たちに助けてもらった」という。大島氏は、この片貝の人々への感謝の気持ちを何らかのかたちで表したいと、片貝小学校に、毎月少しずつ本を贈ることになる。こうして贈られてきた本は、八百冊以上を数え、二十年の歳月を経て、「大島文庫」（昭和51年5月独立）というかたちで実を結ぶ。

本の背には、大島文庫のシールが貼付されている。

片貝小学校の創立百周年記念誌『百年の歩み』（発行：昭和51年8月）によると、大島吾一氏寄贈図書の第一号となったのが、『小川未明童話全集』全12巻（講談社）であったという。これに収められた当時の教職員の手記には、「本が届いて驚いたことには、本の力（ママ）表紙に未明（故人）さんの謹のサインがあったのである。大島さんは熊々子どもたちのために出版社を通じ、未明さんを訪ねてくれたのである。」と書かれている。大島氏と未明、片貝小の児童をとりまく二人のあたたかな心が四冊の童話全集に宿っている。



未明署名入『小川未明童話全集』四・五・六・七巻



大島吾一氏自筆の額と大島文庫（一部）
現在、大島文庫の一部は、片貝純文資料館の図書室で閲覧することができる。

本の寄贈が始まる三年前、昭和28年11月、中郷村（現 上越市中郷区）の中郷小学校校庭にある「夕日ヶ丘」に、未明の詩碑が建てられている。「夏が来るたび雲に風に少年の日を思ひ出す　妙高山いまも若きたましいを呼び高原に咲く花白赤清香を放ちて　かがやく海を杳かに望む　ああうるわしきかな　ふる里よ」という妙高山への強い憧憬と故郷への思いが込められた一篇である。

この詩碑の建立には、当時の中郷村長松井泉吉氏が大きく関わっている。松井村長の回想記（松井百々樹氏所蔵）によると、昭和26年、未明が芸術院賞を受賞した頃から、中郷村の村会議会で、未明文学の「ヒュウマニズム的な高い薫り」を村の将来を担う子供たちに伝えるため、未明の詩碑を建立する話が出ていたという。松井村長は、東京杉並区高円寺の未明宅を訪ねるが、「極端に謙譲な未明」に、自分の詩を石に彫るなどとんでもないと断られ、最初の訪問では、「三学校へ一業づゝの染筆をいただいて帰ってきた」。その後も、松井氏はあきらめずに、未明を訪ね、昭和28年の夏、未明から前掲の詩「夏が来るたび」が贈られたという話である。

最初の訪問で松井村長が持ち帰った「三学校へ一業づゝの染筆」には、それぞれ未明自筆の詩が書かれ、中郷小学校、片貝小学校、中郷中学校の三校に届けられたという。このうち二点については、今も中郷小学校（いかなる烈風も若木を折る力なし仲びよ子供等よ）、中学校（雲の如く高く雲のごとく輝きくもの如く囚われず）の校長室に飾られている。

片貝小学校で保管されてきた「明日の社会を知らんと欲せば今日の子供を見よ」の掛軸は、現在、大島氏寄贈の小川未明童話全集四冊とともに、文学館で所蔵している。夕日ヶ丘の詩碑と同様、未明の子どもたちへの愛情と若やかな詩情がこめられた資料である。

【調査協力】
松井百々樹氏
上越市立中郷小学校
上越市立中郷中学校
片貝純文資料館

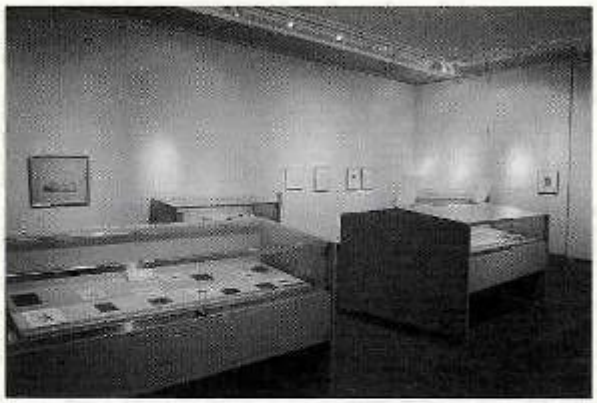
【参考文献】
『郷土の小川未明』高田文化協会、昭和47年
『百年の歩み』片貝小百周年記念誌編集委員会、昭和51年
『中郷村史』中郷村史編集会、昭和53年

平成19年度特別展（報告）

未明童話を彩る童画家 川上四郎展

【開　期】9月29日～10月28日　26日間

【来館者】5710人



未明の童話に描かれた童画をテーマに特別展を開催し、同じ新潟県出身の童画家 川上四郎を取り上げました。川上四郎の挿絵原画、「赤い鳥」、「童話」をはじめとする児童雑誌、童話集など64点を展示し、未明と四郎の芸術的交流を取り上げるとともに、大正から昭和にかけて活躍し、童話、童画を芸術の水準まで高めようと努力した武井武雄、初山滋ら童画家たちの活動の一端を紹介しました。

同時に、絵本「太陽とかわず」（小川未明作・架空社発行）の絵を描いたこしだミカさんの「太陽とかわず絵本原画展」を開催しました。

【主な展示資料】

第一章 童心のふるさと

・生家とこどものころ（絵画）

・川上四郎自筆詩「一本橋」

第二章 児童文化ルネッサンス

・未明童話「金魚売」（挿絵原画）

・未明童話「遠方の母」（挿絵原画）

第三章 未明と童画家たち

・未明童話「赤い船」（口絵原画）

・未明童話「電信柱と妙な男」（挿絵原画）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

特別展記念講演会

「未明童話と四郎童画」

講師　上笙一郎氏（児童文化評論家）

特別展記念講演会として、児童文化の研究者であり、児童出版美術にも造詣の深い上笙一郎氏よりご講演いただきました。上氏は、日本児童出版美術史上で活躍した美術家、その遺族など二十数名に取材し、その著書『聞き書　日本児童出版美術史』（太平出版社、昭和四十九年）を遺まれ、昭和四十四年には、南魚沼郡湯沢町に川上四郎を訪ねています。

本講演では、「未明童話と四郎童画」を軸に、児童出版美術史の流れや聞き書きをした当時のエピソードを交えて、九十分にわたり貴重なお話しをいただきました。紙面の都合上、全内容を紹介することはできませんが、上笙一郎氏の許可を得て再構成したものを左の通り掲載します。

お伽絵から童画へ

『聞き書 日本児童出版美術史』（以下、『聞き書』）これはですね全部当人口調で一人称で書き起こしたんです。川上四郎さんは、太平洋戦争中に疎開をして郷里の長岡ではなくてその途中の湯沢、温泉地として有名なあの湯沢へ帰って山の中腹に家を建てて住んでおられましたから、そこへ訪ねました。山の中腹まで行って、その話を聴いて夕方帰って湯沢の今のホテル式の宿じゃなくて昔懐かしい旅館、温泉宿に泊まって帰ってきたという記憶がありますけれど。川上四郎については児童出版美術の中の重要な一人ですから、まず、児童出版美術の流れというものを頭においていただきたい。

明治の初めのころにはまだ挿絵についての名称がないんですよ。明治の最大の児童文学者というのは巌谷小波という人なんですけれど、その巌谷小波がですね、いっとう最初に出したシリーズが、「日本御伽噺」というシリーズなんです。浮世絵師の流れを汲んだ絵描きたちが実際にその日本御伽噺の挿絵を描いているんですけれども、しかしその挿絵についての名称がないんですよ。当時の人に聞くと御伽噺の挿絵と言っていたそうですけども。そこで私が考え出したのは、御伽噺につけた絵だから、御伽絵って言おうと考え出した。これが間違いでないと悟ったのがずっと後になってからで、岡本一平が出している『新漫画の描き方』（中央美術社、昭和三年）というのがあって、それを見ていたらですね、岡本一平がすでにお伽絵という言葉を使っていました。お伽絵というのは、文字通りの子どもを意識してお伽噺に描いた絵だから、子どもにとってわかりやすい絵。しかもリアルに描くんじゃなくてわかりやすく、強調すべきところを強調して描く。どうでもいいところは省いて、多少漫画に近いように描く。

それが明治期に確立して、大正期になるとですね、お伽噺じゃなくて、小川未明、浜田広介などの新しい童話につける新しい挿絵が必要になる。これを描いて大成させたのが、川上四郎、武井武雄、初山滋といった私が第一世代の童画と位置づけている人たちです。湯沢の家に伺ったとき川上四郎さんから聞いた私にとっての大

事な発見がありまして、明治期にお伽絵があって、大正期になると童画になる。そうするとその中間は、五年ないし十年の期間ですけれど、もはやお伽絵ではないんだけれど、童画ではない、その中間の、両方に入り混じった、この時期の童画をなんと呼んでましたかと（川上四郎さんに）聞くと、「さようこども絵と呼んでおりましたな。」と言うんですよ。ああ、なるほどなあ。子という字を漢字で書くんじゃなくて、全部をひらがなで「こども絵」と書くと、両方の中間の表現の色も出るなあと。竹久夢二の初期のものがそう（「こども絵」）です。それから渡辺与平と言って、夢二のライバルと言われた人もそうです。一時期は夢二より人気があって、渡辺与平は、二十三歳で亡くなったから、あとは夢二の独り舞台になったけど、もしこの渡辺与平が死ななければ夢二の位置は渡辺与平に取って代わられていたかもしれない。この人の描く絵は童画でもないし御伽絵でもない。子ども絵がぴったり。

童画第一世代と川上四郎

さて、御伽絵から童画へ。童画が第一世代で確立されて、それからどう動いていったか。第一世代、これは大体ロマンティックな考えの持ち主で、絵にしても、アールヌーボーや、浮世絵のような流麗な画法、滑らかな画法。直線的ではなく、非常に麗しい絵。

第一世代の人たちは、都市中間層、新中間層の生れ育ちです。新中間層というのは、明治以降に現れた階層であって、いっとうわかりやすく言うと、サラリーマンでしょうね。武井さんは岡谷の地主の家の生れだからやや旧中間層の匂いが強いかもしれないけれど。清水良雄は銀行員の息子。岡本帰一は新聞社の上役の息子。村山知義は軍医の息子、母親は婦人の友社の編集者であり、当時、童話作家でもあった人。必然的に、描いている子供も自然に都市中間層の姿を描くようになる。多くは、半ズボンをはいて帽子をかぶっている格好のよい少年。

川上四郎さんだけが農村の子どもを描いている。ただ、農民の子どもではない。農村風景の中には農民の子どもを描いてはいるが、しかし、農民の子どもの経済的に、生活的に遅退した大変な有様を描いているわけじゃない。雪下ろしにしたって、大変だという印象を与えるのではなく、和やかな印象を与える絵を描いている。

「聞き書」の中で、私が書きつけた川上四郎の言葉を少し読んでみます。「生れたところ、つまり、郷里はこの湯沢からそんなに遠くない新潟県長岡市です。（中略）家は農家でしてね、大地主とは言えないでしょうが、まあ、中地主といったところでしょう。（中略）わたしの童画には田舎の子どもを描いたのが多いし、そういう絵が良いと人様からも言われますが、それはきっと、私が田舎に育って、その気分にいつまでも親しみをおぼえているからでしょう。人間だれしも、子どもの時代には自然のなかで育ったほうがよいと思うし、自然とのふれ合いから生れた気分を主にして童画を描きたいと考えております。」と、こういうのが実際に聞いた話ですけれども。川上四郎さんは、自分の子どもだった時の思い出、子どもだった頃の視点、感情というものをずっと持ち続けていて、しかもそれを包む風景もあるでしょうけれども相当後まで自分の生い立ち、家、その周辺というものに心理的に固着した童画家だったということが言える。

四郎と未明

児童出版美術の絵描き、これは一言で言えば、エリートコースの落ちこぼれです。はじめは、油絵などを描く、本画家を目指していた。しかし、多くの絵描きは絵がしっかりしていない限り自分の手で稼いで食べていけない。お金になるものって何かと言うと、一つは商業デザイン、もう一つは挿絵なんですね。雑誌新聞の方からすると、記事を載せるとすると絵をそえなきゃいけない。人が見てまあまあと思える絵が描ければいいだろうと。武井武雄にしても、川上四郎にしても、そうやって描いているうちにだんだん子どものために描く絵が面白くなれば、その意味もわかってくる。本画をやめて、童画に一生懸命になる。

大正期の主な童話雑誌には、それぞれ専属の画家がいて、「赤い鳥」は清水良雄、「金の星」は岡本帰一、「おとぎの世界」は初山滋、そして「童話」という雑誌、これが川上四郎だったんです。未明は「赤い鳥」に一番たくさん童話を書いているが、二番目に多く作品を発表したのは「童話」。未明が「童話」に書いた童話には、ほとんど七、八割、川上四郎が挿絵を描いている。それが今回展示してありますね。じゃあ二人が一冊の本をかいているのをと探してみると、私の書庫を探した限りでは、ひとつは『紅雀』（小川未明著）、この装丁も、口絵もみんな四郎さん。他に、『未明童話集』昭和二年～六年）が丸善から出ている。とびきり豪華な本で、童話一編について、一枚の挿絵が附されている。この童話集の第二巻の挿絵を川上四郎さんが手がけています。

四郎と、未明の係わり方は、類似性というか、依存性といいますか。二人とも、越後の自然というものから非常な感化を受けている。自分の絵や童話の原点をそこに置いている的なふしがある。以前（平成17年開館記念講演会）にもここで話をしたときに、「赤い蝋燭と人魚」という未明の代表作の話をしたけれど、越後、特に高田との関係を一番端的に、しかも具体的に語っているのがこの作品。童話「牛女」の原型もここにある。親孝行をしないうちに死んでしまった自分の母親が南の山に姿をあらわすというどこか不気味なところがあるこの発想は、雪解けの時期に出る南葉山の種まき爺さんや、妙高山の跳ね馬など、頸城平野の自然景観がなければ生まれないなと思った。これは九州に生まれた北原白秋にはできない発想。未明も四郎の場合も越後の風土、生い立ちというものとの関連が深く、むしろそれを原点としているといっても過言ではない。

最後に、未明と四郎の跡を継ぐ者として、未明と同じ小学校出身の児童文学者 杉みき子さん、作風は違うけれど、同じ越後にいて仕事を続けているという点で画家 村山陽さんの名前をあげておきたいと思います。跡を継ぐ人がちゃんと上越にいる、その思いを結論にしておしまいにします。

二〇〇七年九月二十九日

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

特別展図録　価格300円
頒布中

文学館一年の記録

朗読研修会

四月二十一日・五月十九日
参加者　20名

平成19年の2月から5月までの毎月一回、橘 由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、発声の基礎から魅力的なことばの表現方法まで学び、最後に、未明の童話「真心のとどいた話」の朗読をグループごとに発表しました。受講者からは、「朗読と音読との違いを実技で体感することができた」、「朗読本来の意味内容を感動を持って知ることができた」といった声がありました。

夏の夜の文学館講座　製本教室

六月十二日・十九日・二十六日
参加者　15名

一回目は未明の著書の装幀についてスライドを使って紹介し、二回目からは、愛読書と好みの布を持ち寄り、文庫本をハードカバーに造り替える製本教室を開きました。見返しや検印紙など本の構造に興味を持たれた方も。お気に入りの文庫本が生まれ変わり、それぞれに愛着を持たれたようでした。次回は、「和装本にも挑戦したい」という参加者もいました。

童話創作講座

九月九日・十月七日・十四日（入門コース）
九月二十三日・三十日　（実践コース）
参加者　16名

上越市在住の児童文学作家　杉みき子先生を講師に、入門と実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。参加者一人ひとりが個性あふれるオリジナルの童話を創作しました。作品は、「童話創作講座受講者作品集」として製本され、文学館の図書コーナーで読むことができます。

特別展
未明童話を彩る童画家川上四郎展

九月二十九日～十月二十八日
来館者　5710人

未明童話の挿絵を一〇〇点ほど手がけた童画家 川上四郎の童心あふれる世界を紹介しました。未明童話「金魚売」、「温泉に出かけた雀」の挿絵をはじめとする原画、未明の童話集など64点を展示し、開催初日の記念講演会では、上笙一郎先生を講師にお迎えしました。

また、同時開催で、「太陽とかわず」こしだミカ絵本原画展を開催しました。未明童話の世界が、色彩感ゆたかに描かれ、「童心とダイナミックさに溢れ、素敵でした」（20代女性）、「独創的、あたたかみがある絵でした」（50代男性）といったご感想をいただきました。講演会の内容など、詳しくは、特別展の頁（8ページ）で紹介しています。

こどものための朗読講座

十月六日・十三日・二十日
参加者　29名

未明ボランティアネットワーク主催によるこどもを対象とした朗読講座を開催しました。未明童話「月夜とめがね」「子ざると母ざる」を題材に、発声方法や表現方法などをはじめ、読書と朗読の違いや、難しさ、楽しさを学んでもらうことができました。ボランティア手づくりによる3回限りの講座でしたが、最終回に行った発表会では、こどもたちの上達の早さに驚かされました。これをきっかけにさらに朗読や未明の童話に興味を持ってもらえたよい機会となりました。

手づくり絵本ワークショップ

十月八日
参加者　42名

未明童話「でんしゃのまどから」を題材に、色紙などを自由に使って、とびだす絵本を作りました。木いちごの会のみなさんのお手伝いで、子どもも大人も夢中になって自分だけのオリジナル絵本を作りました。

手づくり絵本のワークショップ

こども朗読講座

童話挿絵教室

十月二十日・十一月十一日
参加者　10名

未明の童話「千代紙の春」に挿絵を描く挿絵教室を開催しました。上越市在住の画家 村山陽先生を講師に、お話の雰囲気を捉え、実際にそれを表現するための画材の使い方、表し方などを実践的に学びました。受講者の挿絵作品は、「絵てがみ展」にあわせて、文学館市民ギャラリーで展示しました。

企画展
未明童話に惹かれた画家 吉田延絵画展

十一月二十二～十一月九日

昨年度、文学館へ寄贈された資料の中から、画家 吉田延（一九二〇－一九九九）が未明の童話「赤い蝋燭と人魚」、「月夜と眼鏡」等をモチーフに描いた「小川未明シリーズ」十六点を紹介しました。画家として、一人の女性として生きた吉田延の感性に圧倒された方も多かったようです。

童話が開く心の扉
～朗読と映画による小川未明の世界～

十一月二十八日・二十九日・三十日

毎年、市内の小学6年生を対象に朗読コンサートを開催しています。栖山貴さんの朗読と翠川敬基さんのチェロで未明童話の幻想的世界へと誘うこのコンサートは七回目を迎え、今年は56校2035人の生徒が参加しました。

文学館講座　小説家としての未明

十一月十八日・二十五日・十二月二日
参加者30名

栗原敬先生（実践女子大学教授）を講師に、未明の小説家としての側面に光をあて、自伝的小説「漂流児」をはじめ、未明の作家活動を特色づける「薔薇と巫女」などの作品を丁寧に読み解きました。未明の小説を初めて読んだという参加者も多く、「童話作家としての一般的な事しか知らなかったが、小説家としての作者の生き方などを深く知る事ができ、大変勉強になった」といった声も聞かれました。

小川未明と絵てがみ展

二月十六日～三月二日

上越市内の小学校六年生全員を対象に開催している「童話が開く心の扉」朗読コンサートを鑑賞した生徒から小川未明に宛て、絵手紙を描いてもらいました。毎年、子どもたちのユニークな物の見方、豊かな表現方法に驚かされます。大賞作品は、稲井佑羽さん（里公小学校）の「月夜とめがねをサンクス！！」でした。

童話挿絵教室

文学館講座

平成18年度　小川未明文学館の一年

4月　山福朱実画「砂漠の町とサフラン酒」原画展　4/1～4/23

9月　文学館講座　9/2・9/16・9/30
講師：小埜　裕二氏（上越教育大学教授）
第1回　「〈夏〉の童話を読む」
第2回　「〈姉妹〉の童話を読む」
第3回　「小川未明と宮沢賢治」

文学館講座

小川未明文学館開館1周年記念事業

10月　特別展「御風と未明」9/30～11/12
特別展講演会
講師：金子善八郎氏（糸魚川歴史民俗資料館）

小川未明文学館図録「小川未明の世界」刊行

童話創作講座
講師：杉みき子氏（児童文学作家）
入門コース　10/8・10/29・11/12
11月　実践コース　10/15・11/19

童話創作講座

1周年記念講演会　11/5
講師：阿刀田高氏（小説家・直木賞作家）
演題：「小川未明への旅」

阿刀田氏講演

2月　小川未明と絵てがみ展　2/17～3/4
朗読研修会
講師：橘　由貴氏
（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）
第1回　2/17「こころを癒す朗読法とは」
3月　第2回　3/17「声の基礎、発生の基礎」

絵てがみ展

小川未明文学賞

日本児童文学の父と呼ばれる上越市出身の小川未明の文学精神を継承し、新しい児童文学作品の創造を目指して、「小川未明文学賞」の作品を募集しています。

小川未明文学賞は平成三年に創設され、今年で17回目を迎えます。これまでに延べ7600編を越える作品が国内外から寄せられました。贈呈式は、毎年11月に開催しています。

また、大賞作は単行本で発行され、多くの子どもたちに読まれています。

上越タイムス提供

第17回作品募集

未明の文学精神 〝誠実な人間愛と正義感〟を現代の子どもたちにつちかい育むような鮮烈な児童文学作品をお待ちしています。

◆募集作品
・小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。
・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚

◆応募資格
年齢、プロ・アマを問いません。

◆応募方法
上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆締切り
平成20年7月31日(木)（当日消印有効）

◆入選作
・大賞1作（ブロンズ像・賞金100万円・副賞）
・優秀賞2作（賞金20万円・副賞）

◆発　表
大賞・優秀賞の受賞者は、11月下旬に本人に直接通知します。

◆贈呈式
平成20年11月下旬（会場・東京都内）

応募・問合せ先
〒943-0832 新潟県上越市本町5-5-9
ランドビル2F
街なかサテライト内
上越市文化振興課
「小川未明文学賞係」
TEL 025-526-6603
FAX 025-526-6904
E-mail：mimei@city.joetsu.lg.jp

＊受賞のひとこと＊

今から十年前、手さぐり状態で文芸創作を始めてまもないある日、小川未明文学賞の募集要項に出くわした。幼いころ読んだ未明童話の、数々の場面が脳裏によみがえり、「小川未明」との思いがけない再会が嬉しかった。以来、このコンテストでの受賞は、私の大きな憧れとなった。

初挑戦で最終選考に残り、三度目の応募となる第十五回で優秀賞をいただいた。このときの受賞作は、まさに全力投球で書きあげた作品だったために、四度目のチャレンジを決意するまでには紆余曲折を経た。

やがて新たな物語が生まれ、それを今度こそ多くの子どもたちに届けたい一心で、私は書きはじめた。ヘア・スタイリストを一途にめざす少年と、その家族の物語。大賞受賞のお電話をいただいたときには、「やったよー」と、まずは主人公の少年に向かって叫びたい気持ちだった。

自分の子ども時代をふりかえってみると、いつかどこかで読んだ本の一シーン、ある登場人物、ひとことのセリフなどが、今もなんと鮮やかに胸に残っていることか。大人になった今では、それらの記憶は心の財産である。

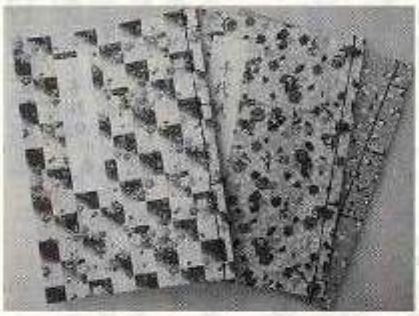
私も同じように、子どもたちの心に長く生きつづける作品を書きたい。書くからにはその意気で―と思うが、目ざすものが大きくなるほど、作品の一行一行にはいっそう細やかな心配りが求められるのだろう。応募当時には、なかなか思い至らなかった点である。

今年も七月の締切日が近づいてきた。応募者の皆様には、受賞というゴールをさらに突き抜け、その先にいる子どもたちに向かう気持ちで、作品に取り組んでほしいと思う。

第16回小川未明文学賞大賞受賞　山下　奈美
（大賞作品「ヘア・スタイリストのなみだ」）

小川未明文学館　ビッグブックシアターおはなし会

未明作品などの朗読をはじめ、紙しばい、腹話術、昔ばなし等など、毎月第２、第４日曜日、午後２時よりビッグブックシアターでおはなし会を行っております。おはなしと一緒に時には歌あり、手話あり、メンバーのみなさんの知恵と創意工夫による楽しいおはなし会です。



おはなし会に参加してスタンプが10個たまるとすてきな賞品がもらえます！

美しい千代紙の表紙で飾ったメンバー手作りのステキな絵本ができました。今回は未明作品より「千代紙の春」です。スタンプが10個貯まったらもらえますよ！みなさんぜひご参加下さいますようお待ちしています！

学校への出張おはなし会

妙高市立吉木小学校の１年生から６年生58人を対象に腹話術や、一枚の大きな絵、ＯＨＰの美しい映像などを使って朗読しました。「心がこもっていて感動しました。」、「また聞かせてください。」と子どもたちは笑顔で話してくれました。

心あたたまる研修会

杉みき子さんを迎えて

今年１月、２月の定例会に、杉みき子さんを迎えて研修会を行いました。小川未明さんの影響を受けたという杉 みき子さんのお話は、雪国高田に住む私たちの心にホッと灯がともるようなお話でした。

出張おはなし会、会員加入の連絡先
〒943-0832　上越市本町５－５－９（ランドビル２階）
上越市文化振興課　TEL：025-526-6903　FAX：025-526-6904
E-mail：mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら vol.4

未明ボランティアネットワークだより

発　行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2008年5月30日

地道な活動を積み重ねて

未明ボランティアネットワーク発足から5年

上越市出身の児童文学者、小川未明のことをもっと知りたい、広めたいという想いから平成15年に未明童話の愛好者、朗読ボランティア有志が集まり発足しました。以来おはなし会や特別展イベントなどの活動を通して、多くのみなさんに支えられ定着してきました。創意工夫と知恵を出し合ってのおはなし会やイベントでのこども朗読講座、手づくり絵本等の活動は参加者に喜ばれています。故郷と自然と人間を愛した小川未明の人間像がより多くの市民のみなさんに親しまれるようになりました。

平成19年度のあゆみ

- 小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会（毎月第2・4日曜日午後2時～）
- 小・中学校、地域への出張おはなし会
- 特別展への協力（こども朗読講座、手づくり絵本ワークショップ、おはなし会、展示監視）
- 会員の研修（イルフ童画館見学、作品等の研修会）

「でんしゃのまどから」

手作り絵本のワークショップ

参加者は、幼稚園から小学生、父母、年配者まで三十数名程、和気あいあいのうちにも、意欲的に制作し、電車の窓から見えるものが、どんどん広がって楽しい作品ができました。

● お知らせ ●

ミュージアムグッズができました！

小川未明文学館では、未明の作品を題材としたミュージアムグッズの販売をはじめました。

■クリアファイル

童話「月夜と眼鏡」を題材とした絵をデザイン。（画：未明次男／小川哲郎）

価格 200円

■一筆箋

未明の第一短篇集『愁人』（装幀：竹久夢二）の表紙をデザイン。

価格 300円

■絵ろうそく

童話「赤い蝋燭と人魚」にちなんだオリジナルの手描き絵ろうそく。絵柄は3種類。大小2サイズあります。

価格 大500円　小350円　朱250円

平成20年度　小川未明文学館わしンダー

5月　朗読研修会①　31日（土）　講師：橋 由貴さん

6月　朗読研修会②　21日（土）

7月　朗読研修会③　19日（土）
　文学館ワークショップ　27日（日）
　　～消しゴムはんこで絵本を作ろう～
　小川未明文学賞締切り　31日（木）

9月　特別展「未明が暮らした町」（仮）
　　9月27日（土）～11月3日（月・祝）

10月　童話創作講座　講師：杉みき子さん
　入門コース　10月5日・26日・11月9日
　実践コース　10月12日・19日　いずれも日曜日

11月　文学館講座（予定）テーマ：小川未明の詩

2月　絵てがみ展　2月14日（土）～3月1日（日）

特別展の他に、随時小企画展を開催。
毎月第2・4日曜日午後2時からおはなし会を開催。

小川未明文学館のご利用案内

開館時間
　火～金曜日　午前10時から午後7時
　　（6月から9月の間は午後8時まで）
　土・日・休日　午前10時から午後6時

休館日
　毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
　休日の翌日・毎週末日・年末年始（12／29～1／3）
　資料整理期間

入館料　無料

お問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
E-mail mimei@city.joetsu.lg.jp
URL http\\www.city.joetsu.niigata.jp\
shisei\gyosei-mimei\index.html

発行　上越市文化振興課　〒943-0832　上越市本町5-5-9（ランドビル2階）街なかサテライト内
TEL：025-526-6903　FAX：025-526-6904　＊4月1日より上記住所へ移転しました。